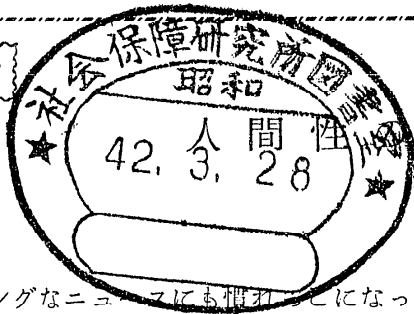




二重構造

寺尾琢磨

ショッキングなニュースにも慣れたことになって、このところ大抵のことには驚かなくなったわたしが、昨年のわが国の出生が一昨年に較べて一挙に50万も減ったというニュースにはいささか肝をつぶした。出生減退そのものは、ベビーブームの終わった昭和25年から最近まで引続いてきたことで、格別珍しいことではないが、それにしても一挙に50万という激減は、わが国はもちろん、どんな国でも恐らく経験したことのない異例中の異例であろう。人口のこの大きな断層が今後、例えば就学年齢に達したとき、また就職年齢に達したとき、必ず起るであろう大きな異変は、いまから十分研究されてしかるべきで、社会科学のほとんど全域にわたる一つの重要課題が生れたことになる。

だがわたしにとってもっと気になるのは、減少の数字そのものよりも、むしろこれを惹き起した動機と手段である。動機は恐らくは丙午の迷信と見る外はあるまい。この年生れの女性が敬遠されることから、親としてこの年に女を生みたくないと希うのは共通の心理であろう。だが女だけを産まないという器用な芸当はできないから、勢い総ての妊娠や出産を避けることになる。その結果が50万の断層となって現われたわけだが、もともと出産性比は男児の方が幾分多いから、この50万のうちの半数強は、巻きぞえを食って陽の目を見なかった男児というわけで、何とも割り切れない話である。世紀を重ね進歩の一路をたどり、遂に原子力時代とか宇宙時代とかいわれる現段階に到達したわれわれの間に、まだこんな馬鹿げた迷信がのさばっているとは驚き入った話だが、さらに驚くことは、この前の丙午すなわち明治39年には、こんな大きな減少は起らなかったことである。常識的に考えても、60年前の方がより迷信的でなかったとは思えない。では以上の結果はどう解釈されてしかるべきだろうか。

結論的にいえば、それは手段の有無の問題である。あの頃は、たとえ産みたくないという気持は今日より強かったとしても、それを実現する手段、すなわち避妊・断種・妊娠中絶は、ほとんど存在しなかったろうし、存在しても許されなかったのである。ところが今日ではそれらは誰の手の届くところにも転っている。気持さえあれば、誰でも容易に利用できるのである。

わたしはこのことから社会の将来に対して少からぬ不安を感じないわけにはゆかない。科学は日一日と新しい強力な手段を開発することによって、絶えず不可能を可能にかえてゆく。それは進歩を約束する所以だが、しかし可能化されるものはつねに必ずしも良いもの望ましいものとは限らない。人口の過剰化を防止し家庭生活の合理化を実現するために案出された出生調節の手段が、馬鹿らしい迷信の実現のためにも使われるとすれば、一つの発明や発見がそもそもいかなる結果をもたらすであろうかは、容易に見当もつきかねる。科学や技術は人間の合理性が造り出したものだが、それを利用する肝心の人間そのものはあまりにも合理化されていない。それは新式の武器を振りまわしている野蛮人を思わせる。危険というも愚かである。産業の二重構造が問題とされているが、もっともっと問題にされなければならないのは、人間性の二重構造であろう。ちかごろ未来社会をバラ色で描く傾向が強いが、人間が旧態依然たる限り、むしろ灰色で描くべきではなかろうか。